

この小冊子が、飼い主様ご自身とそのご家族(コンパニオンアニマル)の健康を守るために、身近にある危険<CVBD>について関心と理解を深める一助となれば幸いです。

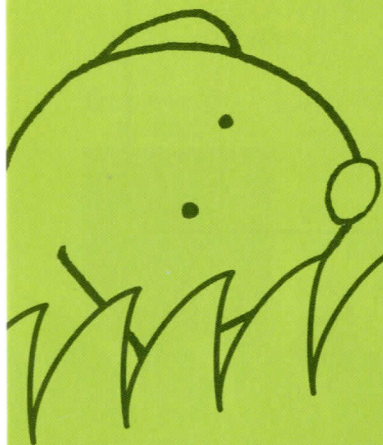
より多くのCVBDに関する情報をお求めの方は、下記Webサイトをご覧ください。

<http://www.cvbd.jp> またはCVBDで検索

ノミ・マダニなどのベクターに対する駆除・予防薬に関する情報はコチラ。

PCから：<http://www.bayer-pet.jp> またはBayer-Petで検索

携帯電話から：製品ページQRコード▶



Bayer HealthCare

バイエル薬品株式会社 動物用薬品事業部

〒100-8265 東京都千代田区丸の内1-6-5 www.bayer-pet.jp

1001-100000-E322-MC

意外と身近にある危険
「犬バベシア症」を知ろう!

監修：佐伯英治 先生(サエキ ペテリナリイ サイエンス)

企画：バイエル薬品株式会社 動物用薬品事業部



Bayer HealthCare

えっ!?こんな身近に? 意外と知られていない 恐怖の「犬バベシア症」。

皆様は「犬バベシア症」という名前を聞いたことがありますか?
散歩や旅行の後、突然発症し、発熱、下痢、嘔吐などを引き起こし、
時には死に至ることもある恐ろしい感染症です。
じつは近年、日本各地で感染エリアがどんどん拡大し、
今や多くのワンちゃんが感染の危機に直面しています。
「犬バベシア症」からワンちゃんを守るためには、
まず、この感染症を正しく知ることから始まります。
この本をよくお読みになり、皆様のさまざまな?を
なるほど!にして、「犬バベシア症」を防ぎましょう!



..... みんなの? INDEX

- Q1 犬バベシア症ってなに?
- Q2 バベシアってなに?
- Q3 どうやって感染するの?
- Q4 バベシアを媒介する「マダニ」って?
- Q5 地域によって発生状況に違いがありますか?

- Q6 発生しやすい時期はいつですか?
- Q7 どんな症状が見られますか?
- Q8 どんな検査を受けるのですか?
- Q9 お薬で治りますか?
- Q10 どうしたら予防できますか?

他にもある怖い感染症<CVBD>

Q1 犬バベシア症ってなに？

時には死に至る、恐ろしい病気です。

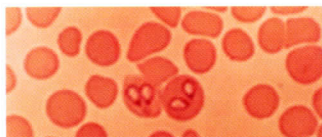
バベシアという小さな寄生虫が犬の血液中の赤血球に感染して、貧血などを起こす病気です。他の動物(牛やヒトなど)でもいろいろな種類のバベシアが見られ、時には死に至ることもあります。

Q2 バベシアってなに？

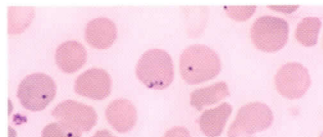
犬の赤血球を破壊する、とっても小さな虫です。

大きさ4.5~5.0 μ mという(顕微鏡でやっと見えるくらい)小さな単細胞の動物(原虫)で、赤血球に寄生して(栄養を吸収し)分裂・増殖します。その時に赤血球を破壊するため(溶血)貧血を引き起こします。

●日本では主に2種類のバベシアの感染が犬にみられます。



B. canis バベシア・カニス
(主に沖縄地方で見られる)



Babesia gibsoni バベシア・ギブソニ
(西日本を中心として本州で見られる)

写真提供:
佐伯 英治 先生

自然界ではマダニの体内に潜んでいて、マダニの吸血とともにいろいろな動物へと感染します。雌成マダニの体内(卵巣)から卵を経て幼ダニ(卵から孵化したばかりのマダニの名称)に移動するため、全ての発育ステージ(幼ダニ~若ダニ~成ダニ)のマダニがバベシアを体内にもつ可能性があります。

Q3 どうやって感染するの？

マダニに吸血されることで感染します。

バベシアはマダニの腸内で発育し、やがて唾液腺(唾液を作り出す組織)に移動します。マダニが吸血を開始するとマダニの唾液腺でさらに発育して感染力を持つようになります。

吸血を始めてからある程度の時間が経つと(*2~3日後と言われていますが、最近の研究では48時間以内でも感染の可能性があることが示唆されています。)唾液とともにバベシアが犬の血管内に入り込み、赤血球に侵入します。すでにバベシアに感染している犬が他の犬とケンカをしたような場合に、傷口を介して感染する可能性もあります(土佐犬などの闘犬で比較的多くの感染症例が見られる理由のひとつとして、このような傷口を介しての感染が示唆されています)。

*参考文献: Susan E. Little, Changing Paradigms in Understanding Transmission of Canine Tick-Borne Disease: the Role of Interrupted Feeding and Intrastadial Transmission., 2nd CVBD symposium proceeding p.30-35



Q4 バベシアを媒介するマダニって？

草むらなどに生息する吸血性の大型のダニ類です。

マダニは数mm(幼ダニ)から20~30mm(成長した成ダニで吸血時の大きさ)に達する大型のダニ類で、イエダニなどの小型のダニ類とは区別され、マダニはすべての種類が雌雄ともに吸血します。8本の脚を持つ、クモ類に含まれる節足動物です。



左より、吸血後雌成ダニ、未吸血雌成ダニ、未吸血雄成ダニ、未吸血雄若ダニ、マダニ卵
マダニ提供: 田村 幸生 先生



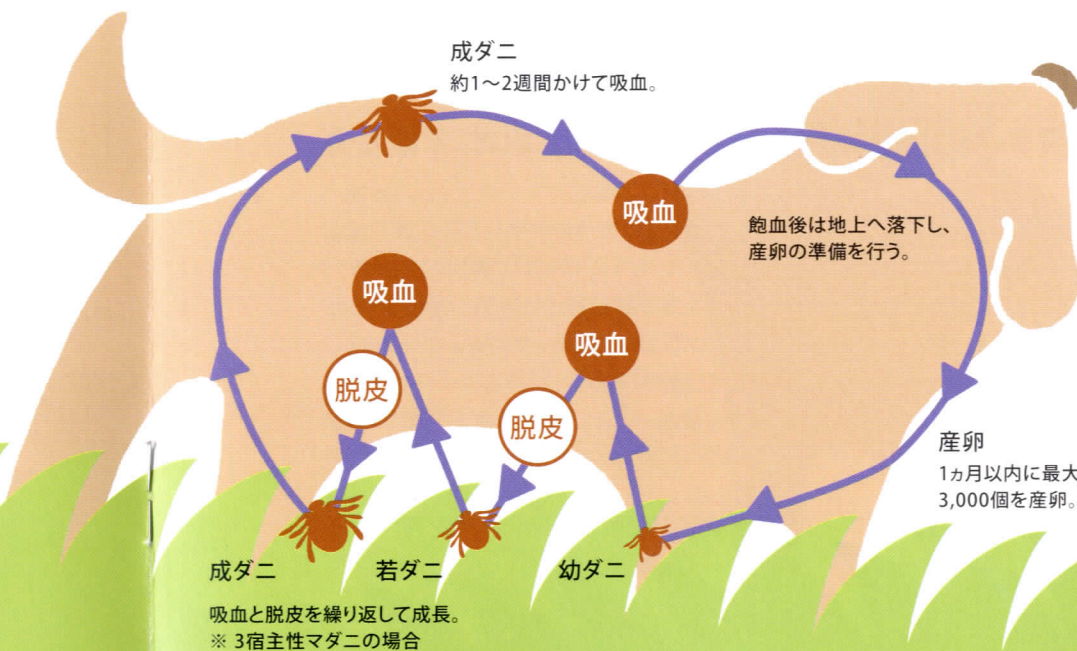
犬に寄生したマダニ

●マダニのライフサイクル

卵から孵化した幼ダニは吸血源となる動物に寄生して吸血すると、宿主動物から脱落して地上で脱皮し若ダニになります。

若ダニは新たな動物を見つけてふたたび寄生・吸血して、満腹(飽血)になると再び地上に落下し、脱皮を経て成ダニへと発育し、さらに3回目の吸血の相手を探します。

とくに成ダニの雌は産卵のために大量の血液を吸血します。このようにマダニの唯一の栄養源は血液であり、各発育ステージで雌雄ともに吸血します。



Q5 地域によって発生状況に違いがありますか？

最近では関東や東北でもバベシア感染の報告があります。

バベシア症の発生地域については様々な疫学調査が行われています。古くから奈良県生駒山系や兵庫県六甲山系などの近畿圏をはじめとして関西以西の中四国～九州、沖縄の一部地域で特に多発していますが、最近では関東や東北でもバベシア感染の報告があります。

*平成19年度日本獣医師会学会年次大会プロシーディングより引用

Q6 発生しやすい時期はいつですか？

5～6月と9～10月が発生のピークです。

2009年に香川県の井上獣医師らによって発表されたバベシア症例（2000年4月から2008年10月までに犬バベシア症と診断された犬135例）に関する学術レポートによれば、1年間の内で5～6月と9～10月に発生のピークがあります。発症年齢は0～7歳に多く見られ、若い犬の活発な行動習性とマダニの活動時期（主に若ダニの活動が活発な時期と初秋の幼ダニが多く発生する時期）が、バベシア感染症の発生動態に関与していると推察されています。

参考文献：2009年日本獣医内科学アカデミー プロシーディング
「犬バベシア症 135例の検討」、井上知子、須崎信茂ら（すざき動物病院）

Q7 どんな症状が見られますか？

食欲低下、貧血、発熱など、様々な症状が認められます。

一般的には、バベシアに感染してから数週間して症状が現れることが多いと言われています。

（一般的な潜伏期間：バベシア・ギブソニでは2～4週間、バベシア・カニスでは10日～3週間）

2009年に香川県の井上獣医師らによって発表されたバベシア感染症例（2000年4月から2008年10月までに犬バベシア症と診断された犬135例）に関する学術レポートによれば、初診時の症状として元気・食欲の消失（116例）、嘔吐・下痢（16例）、発熱（75例）、貧血（45例）、尿色の変化：濃い色になる（63例）が認められました。

参考文献：2009年日本獣医内科学アカデミー プロシーディング
「犬バベシア症 135例の検討」、井上知子、須崎信茂ら（すざき動物病院）



Q8 どんな検査を受けるのですか？

血液や遺伝子を検査して、バベシアを検出します。

血液を採って標本を作り、赤血球の中のバベシアを顕微鏡で確認する直接鏡検法が一般的ですが、近年では、バベシアに対する抗体を測定する方法やバベシアの遺伝子を検出する方法なども一部の施設で行われるようになっていきます。

Q9 お薬で治りますか？

特效薬はなく、完全治癒が困難な病気です。

犬のバベシア症は、現在のところ特效薬といわれるものが無く、お薬での完全治癒が困難な病気です。症状が治まっても完治せずバベシアが体内に潜んでいることがあります(不顕性持続感染)、何らかの原因で再発が見られる症例も多く知られています。

Q10 どうしたら予防できますか？

動物用医薬品などを用いて、マダニの吸血を避けることです。

犬同士のケンカによる創傷感染を除けば、マダニ駆除効果の高い動物用医薬品を使うなどしてマダニの吸血を避けることが、現在のところ最も現実的な予防法です。お住まいの地域で犬バベシア症の発生状況やマダニ対策が必要な期間などについて、かかりつけの動物病院で確認しておくことが重要です。もしマダニが既に犬の体表に咬みついているのを発見した場合は、無理に引っ張って取ろうとせずに(マダニの口器部分が皮膚の中に残ってしまい、化膿することがあります)動物病院で適切に処置してもらいましょう。

●ピンセットでつかまれたマダニ



他にもある怖い感染症〈CVBD〉

マダニによって媒介される感染症は犬バベシア症だけではなくありません。また、マダニ以外に吸血性の昆虫としてよく知られているノミや蚊なども、様々な病原体を動物に媒介します。その被害はペットだけではなくヒトにもおよぶことがあります。2008年8月に宮崎県で起きた日本紅斑熱感染者の死亡事故のニュースは、まさにヒトがターゲットとなった一例です。

このように病原体を媒介する虫はベクター (Vector: 媒介性節足動物) と呼ばれており、ベクターによって特に犬に媒介される病気をケナイン・ベクター・ボーン・ディシース (Canine Vector-Borne Disease: 犬の節足動物媒介性疾患) といいます。

特に近年、地球温暖化の進行に関連して世界中で起こっている気象の変化により、このような感染症の発生地域や感染頻度が様々に変化してきています。特にペットと一緒に旅行される時などは、目的地のこれら感染症に関する情報をチェックし、予防対策を万全にされることをお勧めします。

●日本国内の主な節足動物媒介性疾患一覧

媒介節足動物	媒介性疾患	感染/媒介動物	人獣共通感染症
マダニ	犬バベシア症	犬	-
	ライム病	犬	○
	Q熱	犬・猫・ウサギ	○
	日本紅斑熱	-	ヒトのみ
ノミ	猫ひっかき病	犬・猫	○
	瓜実条虫感染症	犬・猫	○
蚊	犬糸状虫症	犬・猫	○

